

都市近郊河川での天然アユの産卵床改良方法

近年、荒川水系の都市近郊河川では、アユの天然遡上量が増加しており、有効利用が期待されています。しかし、漁場におけるアユの生息密度は、好漁場とされる値には至っておらず、アユ資源量の増加が望まれる状況です。

そこで、朝霞市地先の黒目川において、アユの産卵場を調べたところ、水深（適切な範囲は10～60 cm）や流速（60～100 cm/秒）は望ましい範囲にありましたが、河床の砂利の大きさ（適切な範囲は0.5～3 cm）がやや不適でした。このため、クマデを使って細かい砂泥を流し、大きな石は拾って取り除くことで河床を人工的に産卵に適した状態に近づけることができました。

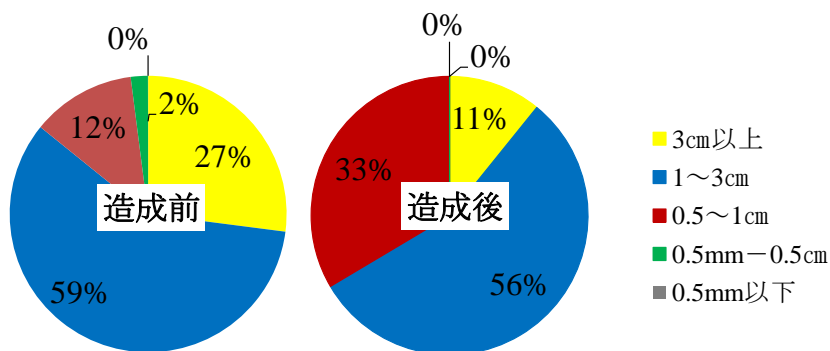


黒目川を遡上してきた天然アユ

3月下旬から4月ごろに川を遡上する。

産卵床造成の様子(左)とアユの卵(右)

造成は、10月頃行う。クマデで細かい砂泥を流すことにより、卵のふ化率向上につながる。



産卵床造成前後の砂利組成

造成後は、細かい砂泥(0.5mm～0.5 cm)が少ない。

(水産研究所 水産技術担当 TEL 0480-61-0458)